SECO

茨城県海外子女教育
国際理解教育研究会

2002年度　広報誌

会　長　あ　い　さ　つ

「新しい世界観に立って」

茨城県海外子女教育・国際理解教育研究会
会長　　細野　泰也

昨年９月１１日の同時多発テロは，全世界の人々が，自分の国だけの視野に立っての世界観を根底から変えざるを得ない大事件であった。″日本人とは″でなく，″世界の中の日本人とは″を問い直すべき一年間であった。ところが，今年９月１７日の日朝首脳会談では，すぐ隣国であり，近くで遠い国との会談こそ，我国国民に与えた衝撃は，想像もしなかった程大きかった。日本に対して「拉致」はないと言い続けてきた国が，「拉致」を認めたことは，我々には近くて遠いイメージを一層高めた事実であり，また，新たな疑いを大きくさせた問題提示でもあった。日本人としてどうこの問題をとらえればよいか，大きな問いかけの「日朝首脳会談」であった。

ベルリンの壁の崩壊後，冷戦時代から，世界の政治は大きく変化して，一極化，多極化へ変化しつつある。その要因の第一は″宗教″であろう。今までの歴史，文明，政治，経済等について，観点を変えるべき時代に入りつつある。この大きな変化に，我々会員が国際理解教育の原点に戻って模索し，新たな課題をぶつけられている。

なお，本会として，本年度は８月２０日に茨城県教育委員会義務教育課の高丸知道管理主事先生，川崎敏子指導主事先生のご参加をいただき，″在外教育施設派遣教員帰国報告会″をホテルレイクビュー水戸にて開催した。今年帰国された３名の先生方に，ご多忙の中，貴重な体験をご報告いただいた。会員及び会員以外の先生方に多数ご参加頂き，今後の学校教育の実践に生かせる報告がなされて大成功であったことを，会員の皆様にこの紙面をお借りしてご報告する。

さて，今年度の本会の広報誌″ＳＥＣＯ″の発行において，今年度帰国された４名の先生方，そして，現在各国へ派遣されている１８名の先生方からの貴重な体験の原稿によって，この広報誌が発行できた。海外での勤務校の様子，生活等それぞれ″現地の生の姿″をご投稿いただき，会員のみならず県内の先生方にこの広報誌の大きな価値を少しでもご理解いただければ幸いである。

最後に，平成１６年には第１５回関東ブロック全国海外子女教育・国際理解教育研究大会が茨城県で開催される予定である。関東ブロック茨城大会の準備については，今年中に役員会を開き主題設定等の大まかな方向づけを決定しなければならない。平成１５年度の″在外教育施設派遣教員壮行会″か″在外教育施設派遣教員帰国歓迎会″の機会に，各会員の先生方に，開催期日，開催地，役割等の確認をし決定していただくように考えている。ぜひ，平成１５年度の関東ブロック群馬大会へご参加いただき，平成１６年度の関東ブロック茨城大会の成功を目指して，会員の皆様のご協力を得て新しい時代を先取りした大会を開催して，実り多い大会にいたしたく，会員各位のご協力をお願いする。

本年度帰国された先生方からのお便り

校長室だより

チロル研修旅行について

取手市立永山中学校　　会川　忠雄

中学部１，２年生（男３・女２，計５名）それに引率教員２名の編成で，「チロル研修旅行」を実施しました。子供達と確認し合った研修旅行のめあては，次の３点でした。

①「オーストリアの風土や自然，文化遺産等に直に接して現地理解を深め，より広い視野に立って物事を考えられる力をつけよう。」

②「生徒の相互理解を深め，協力することの大切さを学ぼう。」

③「英会話学習を中心とした語学研修の一環として，旅行の諸場面での語学実践を通して，コミュニケーション能力の向上を図ろう。」

各学年では，この研修旅行に備えて，１学期から，インターネットで資料を収集したり，その資料についての話し合いや発表をしたりして事前学習をしてきました。また，社会や道徳でも関連した学習を積み重ねて来ました。その事前学習が功を奏し，今回の研修旅行が実りあるものとなりました。

一日目，９月２５日早朝，ウィーン西駅を出発して一路リンツに向かいました。リンツから約20kmほどのところにマウトハウゼンがあります。ここで，強制収容所を見学しました。パネルの生々しい写真に驚き，ガス室では「息苦しい感じを受けました。」「未だに亡霊が宿っているような部屋の雰囲気でした。」と，震え上がるような体験をしました。

午後はリンツ旧市街を散策し，インスブルックへ向かいました。

二日目，トラツベルグ城（マクシミリアン狩猟のための館）では現城主の方から直接お話を聞いたり武器のコレクションを見学したりしました。「日本の鎧甲も展示されていて，とても驚きました。」との感想もありました。武器の移り変わりを生徒はどう感じ取ったのでしょうか。

午後は，ガラス工芸で有名なラッテンベルグに移動して工房を見学。更に，ハルでは銀貨鋳造所を訪ねました。

三日目，インスブルックカードを最大限に利用して市内を歩き回りました。

（黄金の小屋根では）「中を見学しましたが，そのときの説明がとても印象に残っています。」

（ケーブルカーでノルトケッテに登って）「雪景色を楽しんだり，雪遊びをしたりしたのが楽しかった。」と，話してくれました。

四日目，この日のメインは英会話の実践でした。観光客を相手にしてのインタビューです。日本についての質問をしたり，地図で東京などの位置を説明してもらったりしました。中には，５人もの相手に積極的に話しかけた生徒もいて，頼もしく感じたことでした。（引率教師談）

アンケートの結果は，「世界地図の中での日本の位置は，良く知っているけれど，東京等の都市の位置についてはよく分からないようだった。」というものでした。

感受性のとぎすまされている中学生のこの時期に，３泊４日もの間，同世代の仲間と一緒に過ごした「チロル研修旅行」は，ウィーン生活の忘れられない１ページとなることでしょう。

「やっぱりピラミッドはそこに立っていた」

総和町立釈迦小学校　　浅　野　光　省

３年間の任期を無事に満了し，帰国の途についたのが今年の３月でした。それから日本の生活になれるための第一歩として住むところや引っ越しなどを含めた事務手続きなどで忙しく動き回っていたことが思い出されます。今のところ，大きなカルチャーショックを受けることなく，また浦島太郎状態というわけでもなく，自然に日本の風土や学校の様子にも慣れて，生活も安定してきている面では，順調と言えるでしょう。しかしながら，時代の流れは世界中どこでも同じとは言えなくとも，確実に私たちを取り巻く環境は大きく変化していることを実感しました。スーパーを例にとってみれば，日本に帰ってきてから近くのスーパーなどに陳列されている物の豊富さ，物流の確実さに懐かしさを覚えながらも，持金を考えながら買い物をする生活に戻ってしまったことは当然なのですが，エジプト在住時代は買い物にでかけ，物資を購入するコツをつかむのに苦労した次第です。勤務地に足を踏み入れた一年目，エジプトの生活レベルは決して高いとは言えず，貧富の差がとても激しいものでした。加えて，物自体が少なく，陳列されている生活必需品などはある時に買わないといつ入ってくるか分からないという問題や同じ物が入ってくるかどうか分からないという問題もあったりして，スーパーの「はしご」をよくしたものです。スーパー自体も，その当時は小さくて寂れた店構えというのが定番で，その数もたくさんありました。二年目になり，ヨーロッパやアメリカの大手スーパーがエジプト市場に参入してきたことにより欧米並みの大きな店舗で，物がたくさん陳列されているような今まで日本で見慣れていた様相に変化してきました。我々のような外国人にとって，それは生活をしやすく快適なものへ変化向上させるきっかけとなり，購買意欲をかき立てるに十分な要素となりました。一方，立場の弱い人々は，物価が高くなるに連れて，より一層生活を圧迫するようになり，ますます貧富の差が開いたのはいうまでもありません。買い物という一つの生活環境をとってみても，エジプトは私が在住していた三年間でめざましいスピードで大きく変化し，向上してきたのですが，一つだけ変わらないものがあります。それは，やっぱりピラミッド・・・，５０００年の歴史の前にピラミッドを取り巻く環境は時代の流れに流されることなく，緩やかに時を刻み，静かにそびえ立っているのでした。

「お世話になりました。」

八郷町立柿岡中学校　　小吹　孝雄

帰国して４ヶ月が経とうとしています。マドリッドでの生活も思い出になりつつある今日この頃，忙しい生活の中にも，懐かしむような会話も妻と時よりするそんな日々です。

まず，帰国して一番に感じたことは，「これから本当の海外赴任が始まる。」というものでした。

３年間のブランクはここ彼処にあらわれてきます。まずは携帯電話，３年間のうちにどれだけ進化したことでしょう。人々の笑顔，全くなくなっているといわざるを得ません。ちょっとしたスーパーでは，高校生のバイト生がつっけんどんな応対，もしかして日本は壊れたんじゃないかと思うことしきりでした。しかし，ある意味では急激な成長を終えた日本に帰ってきた。そして，低成長という時代の新しい教育がやってくるんじゃないかなという予感に，また一丁頑張るかと気合いが入ってきました。

家族も大変でした。友だちに比べれば大したことはありませんが，生活ができる環境を一気に作り上げるということは並大抵ではありません。住宅の確保，車の購入もちろん奥さんの分までということで２台分，教育関係・・・と，古くて新しい世界への誘いは何と大変だったか。わたしの場合はラッキーでした。（ラッキーは自分でよぶものですが）家は新築済み，車も派遣前に新車を購入していたので，友人に渡しておきました。ですので，成田に着いたその時から，教育以外のことはほぼ整っていたのです。それでも３年分の自宅の掃除など１週間やり続けてもまだ終わらないというのが実状でした。

そして教育・・・。まず苦労したのは幼稚園でした。もうすべてが予約されていて，うちの子のはいる隙間はないかに見えました。保育園にも当たったりしました。全然変わらない日本の保育行政にうんざりもしました。またさがし続けるなかには，いろいろな間違った噂もあり振り回され，疲れ切ったというのが本当です。子どものためには頑張るねお父さんお母さんは・・・・・。

でも一番ショックだったのは言葉でした。外国人が話す習いたての日本語を我が息子が話しているではないですか・・・。日本という海外派遣が今始まった感じです・・・。

クアラルンプール日本人学校

つくば市立二の宮小学校　　根本　紀男

マレーシアは，マレー半島南半分とボルネオ島北西海岸地域からなる国です。日本とほぼ同じ面積で，国土の５分の４は熱帯原生林や湿地帯の緑豊かな国です。人口は約２，０００万人。６割を占めるマレー系マレー人（イスラム教），３割の中国系マレー人（仏教あるいは道教），１割弱のインド系マレー人（ヒンズー教）からなる多民族国家です。街なかにはモスク，廟，ヒンズー寺院，キリスト教会があり，各宗教における重要な日は祝日となっています。マレーシアでは，それぞれの民族がお互いの宗教や文化を尊重しながら共生しています。

そうした環境にあるクアラルンプール日本人学校では，特に国際理解教育に力をいれています。小学部高学年，中学部の希望者を対象にしたマレー人家庭で寝食をともにするカンポン（故郷）ホームステイ。ここでは高床式の家で，大家族の暮らし，マンディ（水浴び），手で食べる食事など，文字どおり異文化を体験することになります。普段から現地校との交流も活発に行われており，学年ごとに招待したり訪問したりしています。インターナショナルスクールとのスポーツ交流も盛んで，年間を通して陸上，水泳，バスケットボールなどの大会に参加しています。７月には日本人会が中心となって盛大な盆踊り大会が催されます。やぐらの上では中学部３年の男子生徒が太鼓をたたき，女子生徒がそのま

わりを踊ります。踊りの輪の中には，交流している現地校の学生も一緒です。約５万人もの人々が参加するこの盆踊り大会は，すっかり地域の名物として定着しています。ちなみに，クアラルンプールに住む日本人は１万人弱ですので，参加者のほとんどは地元の人たちです。

また，クアラルンプール日本人学校では情報教育も積極的に推進しています。２００台のコンピュータが導入され，それらがすべてＬＡＮで結ばれ，コンピュータ室だけではなく各教室からもインターネットに自由に接続することができるようになっています。ホームページやインターネット上の掲示板では「教えてマレーシア」「郷土料理お国自慢」などマレーシアの情報をたくさん発信しています。マレーシアで生活しているクアラルンプールの子どもたちから日本の友だちへ，マレーシアの現地の生の情報を発信することを目的として，常時活動しています。この掲示板（メーリングリスト）に参加ご希望の方は，下記もしくは根本へお問い合わせください。スタディノートを使うと簡単に交流が出来るようになっています。

クアラルンプール日本人学校ホームページ
http://www.jskl.edu.my/
インターネット掲示板担当
高橋先生　　ytakahas@jskl.edu.my

在外教育施設に派遣されている先生方からのお便り

平成１２年度派遣
多民族国家マレーシア

コタキナバル日本人学校　小出　治夫

平素ご無沙汰していますが，会員の皆様におかれましてはますます御活躍，御健勝のことと存じます。日本は秋真っ盛り，めっきり涼しさも増したことと思いますが，赤道直下のここマレーシア（ボルネオ）は，相変わらずの暑さが続いています。半年あまりの乾季が終わり,今は雨季に入り比較的雨の多い日となっています。その暑さにも負けず児童生徒達は夏休み体験発表会，全校キャンプ，日本からの合唱団との交流会など９月から目白押しの行事をこなしています。１１月には市内の文化ホールで日本文化紹介を兼ねて行う学習発表会を控え，全校が１つになり取り組んでいるところです。

さて今回は３年目にしてあらためてマレーシアについて紹介させていただきます。

マレーシアにはマレー人，中国人，インド人を中心に共に１つの国で生活する複合民族社会です。全人口のうち約８割に当たる１７００万人が西マレーシア（マレー半島）に残りの４００万人が東マレーシア（ボルネオ島）に住んでいます。総人口の63％を占めるマレー系マレーシア人は農業や漁業など１次産業の他，公務員などに携わっている場合が多く実際官庁の職員の９割近くがマレー系に占められています。これはブミプトラ政策と呼ばれるマレー人優遇政策によるものです。民族的に商才に長ける中国人は自営業で成功している人が多く，クアラルンプールやイポーなど商業や工業が発達した都市を中心に経済的に強い勢力を持っています。一方インド系マレーシア人は持ち前の雄弁さを生かし，弁護士や両替商，医師，教師，レストランなどに従事していて少数派ながら得意の分野に進出しています。上述のブミプトラ政策により

経済的，政治的に民族間のバランスがうまく取れているようです。
１つの国に言葉も文化も違った民族が共存する，難しい立場に立たされているマレーシアですが，建国以来この国に共に暮らす各民族はそれぞれの文化の違いを受け入れ，相手を変えようとするのではなく，お互いが尊敬しあうという「多民族国家」としては理想的な形で歩んでいます。治安の良さもアジアの中では優等生と言えます。時々チャイニーズマレーシア，インディアンマレーシアなどという呼称で統一されるが，中国人でもなくインド人でもない新しいマレーシア人が暮らす新しい国家の形が誕生する日もそう遠くないかもしれません。
多民族国家マレーシアでは，一歩街に出ると実にさまざまな言語が飛び交っています。日常の会話は各民族の言語，マレー系ならマレー語，中国系ならば中国語，インド系ならタミール語が使われています。異民族間ではマレーシアの国語であるマレー語や英語が公用語として使われています。都市ではだいたい英語が通じ日常会話は英語で済ませてしまうので，３年間すんでいても私の場合はマレー語が進歩していません。日本と環境の違いはあるとは言え，３カ国語をうまく使い分けている人々を見るに付け羨ましく思う次第です。マハティール首相のＬｏｏｋ　Ｅａｓｔ政策（東方政策；日本の科学，技術。文化を見習う）により国民が一致団結しての国造りに取り組んでいる様子が伺えます。政府は先進国の仲間入りをスローガンに掲げていますが，その日もそう遠くないかもしれません。
尚時間がありましたら本校のホームページ(コタキナバル日本人学校)をご覧になってください。
会員の皆様方の益々のご活躍を祈念いたします。

海外赴任の光と影

ローマ日本人学校　尾見　裕史

昨年９月のニューヨークの惨事は，別大陸の話ではありませんでした。元アフガニスタン国王がローマに住んでいたこと，イタリアはヨーロッパでもアメリカから最大の経済支援を受けている国であること，ナポリには地中海最大のアメリカ海軍基地があること，そしてキリスト教カトリックの総本山であるヴァチカンがすぐそこにあること，そしてイタリアは法的に宗教団体を保護しているため，その活動が自由にできることなど，「ヨーロッパで最初に危険にさらされるのはイタリア！」と言われる所以がたくさんあります。惨事から１年が経ち，またアメリカがイラク攻撃をほのめかす情勢の中でも，ベルルスコーニ首相がアメリカ寄りの立場を表明するために，アラブ諸国から近いイタリアには不安が漂います。
もっとつらいことがサッカーのワールドカップ時に起きました。ご存知のように，イタ

リアはホームゲームの韓国に敗れて帰途につきました。審判のミスジャッジが原因で，延長戦を落としたと言っても過言ではない敗戦でした。（冷静に見てもイタリアに非があったのですが）その後です。イタリア人の韓国人バッシングが始まったのは。東洋人の見分けがつかないイタリア人は，私たち日本人にも冷たい視線を向け，時によっては侮辱的な行為をしてきました。「俺は日本人だ。分からないなら，黙ってろ。愚か者！」と英語やイタリア語で言っても，聞く耳を持たないほんの一握りのイタリア人のために，この国を愛する気持ちが崩れていくのを感じました。

残り半年。イタリアのすばらしさを肌で，眼で，舌で感じていきたいと思っています。それでも私は日本人。この赴任中，「外国」であった日本をゆっくりと見つめなおし，日本のすばらしさを感じられる心をもって帰途につきたいと願っています。

☆シドニー日本人学校の特色

シドニー日本人学校　教諭　坂入　徹

本校は，日本の義務教育課程と同等の教育を行う在外教育施設として，文部科学省から認定された学校であると同時に，NSW州教育省の認可を受けた私立学校でもあります。

最大の特徴は，小学部に主として豪州の子ども達を受け入れる国際学級を併設していることです。日本人学級では，文部省の学習指導要領に則った教育を行い，国際学級では，現地NSW州の教育課程に基づく教育を行っています。このことから本校職員も，派遣教員１８名に対して，国際学級１２名，ＥＦＬ５名，日本語科３名と半数以上が現地スタッフという状況であり，実施計画書や資料等は日英両語で用意します。また，今年度より会議は英語で行われています。

☆生活指導部からみた豪州

今年度，生活指導部長という立場から，部会資料の準備，部会の司会等を担当しております。この部は，生活のきまりや児童生徒の安全確保などを検討するところであり，日豪の違いが顕著に現れ，互いにぶつかり合うことも多くあります。また，部会が英語で進行するため，現地スタッフの発言が活発であり，現地の指導方法にダイレクトに触れるいい機会でもあります。以下，生活指導部の立場からみたこの国の教育について簡単に紹介します。

豪州の校則

海外というと米国のような自由な校風をイメージしがちですが，豪州は英国文化の影響を強く受けているためかなり厳格です。各学校ごとに制服もあり，帽子，体操服，靴下まで決められています。当然アクセサリーや化粧等も禁止されています。これ以外にもたくさんの生活のきまりがあり，現地校では校則が一冊の本になるくらい詳細に明文化されています。

罰について

児童生徒がルールを守れなかった時の対処方法にも違いがあります。「ルールを破ればペナルティを払う」これが原則であり，勿論体罰は厳禁ですが，「教室の外に立たせる」，「昼休み職員室前に立たせる」，「ランチを食べさせない」，「保護者への警告書をあたえる」，「授業に参加させない」などのペナルティが課されます。ちょっと厳しすぎるよう

にも見えますが，児童生徒はそれらを素直に受け入れます。なぜなら，言い訳をしたり反抗すると更に次のペナルティが課されるのを知っているからです。このような環境で育った児童に対しては，罰を与えない日本のやり方では通用しないことがあります。私も，ミックスレッスン（日本人学級と国際学級合同での授業）を担当しておりますが，当初ペナルティを与えることに抵抗があり，罰をあたえず見逃すと収拾がつかない状況になることもありました。

一方で，よい行いをした者，優秀な成績を収めた者は，みんなの前で表彰され認められます。教室のドアに「今月のＭＶＰ」と題され写真入りで掲示されたり，各教科のテスト上位者も表彰されます。

最後に

このように，別々のカリキュラム，異なった文化を持ったものが，同じ学校の中で上手くやっていくことは簡単なことではありません。まず互いをよく理解し合い，互いの良さを認め合うことが大切だと感じました。本校ならではの苦労もありますが，毎日が教員として貴重な研修の機会であります。任期も残り少なくなりましたが，子どもたちが将来日豪の架け橋となり，また世界の人々と協力し，共に活躍できる人物に育ってくれることを願いながら，研究実践を続けていきたいと考えております。

シドニー日本人学校ホームページ　www.sjs.nsw.edu.au

カラチのこと

カラチ日本人学校　松本　洋一

カラチ日本人学校は，わたしが赴任してからすでに２回，休校の憂き目にあっています。１回目は昨年の同時多発テロ後，隣国アフガニスタンで対テロ戦が始まってから３ヶ月。今年もカシミールを巡ってインドとの緊張が高まったことにより，６月から２ヶ月間日本に戻りました。そのほかにもフランス人や米総領事館をねらった爆弾テロ，キリスト教徒への襲撃などが市内で起きていますし，今年は民政移管に向けての総選挙が１０月１０日にあり，各政党は集会やデモなどを毎週のように行っています。

日本からご覧になると，なんとあぶないところなのかとお思いかもしれませんが，実際に暮らしてみると危険を感じることはありません。イスラム教の習慣は確かに違和感を覚えることもありますが，人智の及ばないおおきなものに対して常に畏敬の念を抱く彼らをみると，いまやなにものもおそれない（かのように見える）日本人には，無心に敬う対象をもてるひとたちが，ときにうらやましくさえ思えます。

カラチ日本人学校でも本年度から「総合的な学習の時間」が導入されました。少人数（小中あわせて９名）ですので，全校での活動が多くなります。今年は，ＷＷＦ（世界野生生物保護基金）カラチ支部の諸活動に参加し，「パキスタン・カラチの自然を知ろう」を柱の一つにしています。

カラチはインダス川の大デルタに面して世界有数のマングローブ帯を持ち，アラビア海に面した砂浜はアオウミガメの有名な産卵地です。「総合的な学習の時間：カラチタイム」では８月にマングローブ林の見学とウミガメ産卵地の海岸清掃，９月には産卵の見学をしました。今後はマングローブの植林や，渡り鳥の観察（カラチはパキスタン北方に棲む鳥の越冬地でもあります），などを行っていこうと考えています。子どもたちにとってはな

んといってもウミガメ見学が最も印象的だったようで，月夜の砂浜に上がってくる体長１メートルを超える親亀を見たあと,保護官たちが孵した５センチの子亀を放したときには,千分の一以下しか帰ってこられない彼らに一所懸命声をかけていました。

雑感

サンディエゴ補習授業校　田村　雅人

私は補習授業校に赴任した。近くには日本人学校がない。その結果，我が娘もアメリカの現地校に通う事になり，日本に帰れば，帰国子女と呼ばれることになってしまった。海外でがんばっている帰国子女のために派遣されたが，家庭でも身をもって，帰国子女教育に関わることになってしまった。

娘は小学校1年生を修了してアメリカに渡った。現地校には，その年の５月に１年に編入学をした。もっと早く編入学をしたかったが，ちょうど休みであった。出直して行くと，今度は予防接種を受けないと編入学できないと言われ，1日に２本の予防接種を受けた。ちなみに長男のときには，1日４本の予防接種を受けた。日本では考えられないことだ。

最初は当然英語が分からない。1日中訳の分からない言葉の中で過ごした娘の事を思うと，よくがんばってくれた，と褒めてあげたい。しばらくして，娘が泣いて帰ってきた。よく聞くと，学校で「トーク，トーク(英語を話せ！)」と男の子にからかわれていじめられているという。さっそく，放課後に面談を申し込み先生に相談をした。話を聞き終わると，先生は娘を抱きしめて「だいじょうぶよ。がんばって」と励ましてくれた。日本でもいじめの解決はなかなか難しい。先生が指導しても陰で続いている場合がある。しかし，娘の場合,事実関係がはっきりした段階で先生が相手の男の子に厳しく指導してくださり，それ以後いじめもなく，元気に学校に行っている。なぜ，こんなに先生の指導が効果的なのか。それは，厳しい罰があるからだそうだ。何回も指導を受けて改善されない場合，たとえ義務教育段階(アメリカは高校まで義務教育)であっても退学させられ，問題行動を起こした児童生徒が行く学校に送られるそうである。自由の国アメリカというイメージがあるが，各人の自由を大切にするがゆえに，決まりを破った者への罰は厳しい。

娘は今年の９月より４年生になった。長男はキンダーガーデンに入学した。４年になった途端，現地校の宿題は大変レベルアップした。毎日の宿題のほかにプロジェクトと呼ばれる宿題も出される。これはテーマが与えられ，１か月かけて行うものである。

この二ヶ月で出された宿題を紹介すると，「カリフォルニアの記念コイン（２５セント硬貨）のデザイン」である。ただデザインをするだけでなく，様々な資料（カリフォルニア州のウェッブサイト等）を調べて分かった３つのトピックを文章でまとめ，５つのデザインを考え，その中から１つ選択する。その選択した理由やふさわしい理由などをまとめて提出するのである。子供だけではできない。当然保護者の協力が前提になっていると思われる。

その次のプロジェクトは「古典文芸作品を読んで，　場面ごとに感想を書く，幼児用に絵本を作成する，映画化する為の脚本を作りプロデューサーに売り込む」などである。

只今，親は宿題に悪戦苦闘中である。苦労した甲斐があってか，レストラン等に行くと娘の英語はよく通じるので，従業員は娘にばかり向いて話をしている。悔しいような嬉しいようなである。

補習校の宿題もある。４３日間で教科書を学習し終えるわけだから毎回の宿題の量も半端ではない。毎日が宿題との「闘い」である。

ルーマニア教育事情

ブカレスト日本人学校　　柴田　均

赴任して３年目になります。この国は制度や法律がめまぐるしく変わります。社会全体が急速に発展をしているので仕方がありません。２００７年にEUへの加盟が認められるかもしれないと言うことで，経済の成長はもちろんのことインフラの整備にも力が入っています。教育制度もその大きなうねりのなかにさらされているということです。

現在の学制は，日本のような直線型に近いシンプルなものです。小学部４年，中学部４年。この８年が義務教育期間です。小中学校はほとんどが８年間一緒の学校で学びます。

その次に，高校４年間があります。区切りは違いますが１２年間の教育を受けるのがほとんどです。なかには，小１年から高校４年まで（こちらでは１年生から１２年生まで）同じ学校と言うところもあります。中学卒業後，高校のほかに実業校，職業訓練校（１～２年課程）へ行くこともありますが，かなり減少しています。ここにも，時代の流れが感じられます。高校は，日本と同じように普通科だけでなく,多くの専門科目を持った学校があります。例えば体育科は体操などのオリンピック選手の養成をしています。高校卒業後は，専門学校・上級職業訓練校（１～２年課程），短大，大学となります。大学への進学率が７０％近いと言ったら驚きでしょうか。

さらに，ルーマニア教育の大きな特徴は，国立の学校は授業料がだだと言うことです。大学でもただです。ただし教科書は自分で買いますし，試験を受けるのは有料です。最近は制度が改められ，一部授業料を払うようになったようです。

ルーマニア教育課程については，１週間の授業時数は，小学部２０～２２時間，中学部２５～２９時間です。語学には相当力を入れています。１年生から英語の授業（選択科目）が入ります。３年生からは，第１外国語必修，さらに５年生（中学部）からは第２外国語が入ります。語学の授業時間は，全体の３０％を占めます。街角でも，若人はみんな英語を話せます。（そんな気がします）また，選択教科にも外国語や外国の文化を研究する講座がほとんどです。我々が交流会をしてもらっている学校には日本語の講座もあります。

これからも，どんどん進歩していく国だと感じます。

平成１３年度派遣

フランクフルトにおける「外国人」

フランクフルト日本人国際学校　飯沼久子

日本人学校に赴任してから１年半。任期が２年の我々にとって，任期満了まであと半年となりました。もっとも，ほとんどの先生方は延長を希望していることと思いますが…。

さて，今回は，ここフランクフルトでの「外国人の扱い」について話したいと思います。

ドイツはＥＵ諸国の中でも移民や外国人労働者が多い国ですが，とりわけフランクフルトにはトルコ人を筆頭に種々雑多の外国人が暮らしています。昨年のテロ事件の容疑者がドイツに住んでいたことは記憶に新しいところですが，イスラム系の人々も少なくありません。これら外国人たちは押並べて，この町にとけ込んでいるように見えます。本人たち

の振る舞いはもとより，買い物に行ってもレストランで食事をしても，外国人だからと特別な扱いを受けることがないのです。（当然のようにドイツ語でペラペラと話しかけられて困惑することも多いのですが）道を尋ねられることもよくあります。当初は「何で外国人に道を聞くの？」と面食らったものですが，「外国人」ではなく「フランクフルト市民」としてみられているのだ，ということが肌で感じられるようになってきました。

ここは外国人の代表が議会で発言できるシステムがあり，制度的な面での配慮がなされていることも事実ですが，市民の意識レベルで国際化が進んでいることが実感できる町なのです。役所の仕事が割り当てにならなかったり，道路に犬の糞が点々と落ちていたり，店員の愛想が悪かったりともんだいもあるけれど，人口から見たら大都市とは言えないこの町がなぜ「国際都市」なのか，少しずつわかってきた気がします。それは，ヨーロッパ中央銀行がある金融の中心地だから，というだけではないはずです。

日本人学校を志望した理由の一つが「日本の学校に通う外国人生徒の気持ちを少しでも理解したい」ということでした。概して国際化が進んでいるとは言えない茨城で，どのように外国人に接したらよいのか…。決してフレンドリーとはいえないこのドイツの，フランクフルトの町に教えられました。

『デュッセルドルフでの総合的学習実践』

デュッセルドルフ日本人学校　　志村　克己

新指導要領が完全実施となった今でも，総合的学習のあり方については，どの学校もまだ模索中だと思います。デュッセルドルフ日本人学校では，各学年毎に一年間を通した現地理解につながるテーマを決めて取り組んでいます。

例えば，４年生は「ライン川」をテーマにし，その歴史的背景や流通経済の発展，環境問題について調べています。５年生は「ドイツ人の暮らし」をテーマにし，ドイツの衣食住の移り変わりについて調べ，これからはドイツ人が毎年１ヶ月にもわたり家族で楽しんでいるクリスマスについてマルクト調査やリース作り，老人ホーム慰問など，体験的学習をする計画です。６年生は「戦争と平和」をテーマにし，日本と同じような運命をたどってきたドイツについて調べています。遠足の行き先もテーマに絡めた場所を選んでいます。６年生の修学旅行では，アンネ・マルゴー姉妹が亡くなった「ベルゲンベルゼン強制収容所」を見学しました。そして先日行われた本校最大のイベント「学校祭」では，それらの発表の場として数々の展示発表に加え，各学年ともテーマに沿ったオリジナルの劇を行っています。４年生は，全ての魚が絶滅したライン川を流域の国々が力を合わせて蘇らせた「ラインは生きている」。５年生は，童話作家だけではないグリム兄弟の生き方に焦点を当てた「グリムの世界」。６年生は，ナチスからユダヤ人として迫害を受け，悲劇に見舞われたアンネフランクの物語「リーベキティ」等を上演しています。全ての学年の発表に共通していることはドイツ語のセリフやドイツ語の歌が多く含まれていることです。保護者の中にもドイツ人がいます。近所のドイツ人のお客さんも多くいます。その方達にも楽しんでもらいながら，自分達もドイツ語を身につけるためにドイツ語の授業で学習したことを実践する場として積極的にドイツ語を取り入れているわけです。

また，学校祭のプログラム，ポスター，表示の全てを日独両国語で書いています。インフォメーション係の児童生徒はドイツ語の他，英語でも案内しています。

このようにして小学１年生から中学３年生までの約８００名が，現地理解を深めつつ，ここでしか得られない素材をテーマにそれぞれ総合的学習を進めています。

キトでの１年間

リマ日本人学校　高野裕一

昨年４月にエクアドル共和国のキト日本人学校に赴任しましたが，人数の減少から平成１５年３月に閉校になることが決定し，私は本年４月に隣国のペルー共和国リマ日本人学校に転勤になりました。ここではキトでの１年間の活動の様子を紹介したいと思います。

キトは標高２８００ｍにある高地で四方をアンデスの山々に囲まれた自然に恵まところです。赤道直下で暑いと思われる方が多いと思いますが，高地であるため一年中常に乾燥しており，気温は２０度前後でとても過ごしやすい所です。ただ，酸素が薄く，（低地の７５％程度と言われている）赴任当初は息苦しさや，睡眠不足などの問題もありました。

キト日本人学校は全校生徒１３名，派遣教員５名の小規模校です。私は小学校１年生を担任しておりましたが，児童は１名，授業はいつも１対１でした。日本では考えられない環境です。日常の生活言語がスペイン語のため，日本語で授業を進めるのに多少の苦労はありましたが，私の全エネルギーをその子一人のために注ぐことができたので，言葉の壁は少しずつ消えていきました。短期間で沢山のことを学び，身につけてくれたのです。

学校全体としては，基本的に日本の教育課程に則って教育活動を進めていますが，その中で，現地の特性を生かした特色ある教育活動をいくつか簡単に紹介したいと思います。

①全校体育（剣道）

日本の伝統的な武道を体験させたいということで，週に１時間全校で剣道の練習に取り組んでいます。防具・袴・竹刀などの必要な道具は，海外子女教育財団や全日本剣道連盟，茨城県中体連関係の方々よりいただいた物です。内容は発達段階によって変わりますが，礼儀を重んじ，相手に対する感謝の心をもって練習に励んでおります。

②赤道学習

赤道直下（緯度０度）であるため太陽が真上に見えます。そのため影がほとんど見えません。特に秋分の日には時間によって影がすべて消えるので，そんな条件を利用して学校近くのミタデルムンド（赤道標）という所へ実験器具を持って学習に行きます。

③エクアドルタイム（総合的な学習の時間）

エクアドルの動植物・食べ物・衣服・楽器・貿易など幅広いジャンルの中から各自が関心のあるテーマを選び，研究を続けています。テーマの一例としては「有名なエクアドルバナナの育て方」などがあげられます。資料がないなどの理由で紆余曲折はありますが，意欲的に取り組んでいます。本年度は最終年度と言うことで，世界遺産であるガラパゴスについて全員が研究を進めています。６月には全員で現地へ学習旅行に行きました。

この他にも現地校との交流活動（こどもの日・雛祭り等）エクラン（体力づくりのため高地を走る）やスペイン語会話，英会話など在外ならではの活動がたくさんありますので詳しくはホームページをご覧ください。

全校体育（剣道）

ガラパゴス諸島

担任と児童
（リマ日本人学校　高野裕一先生）

土曜日は国語（日本語）の日

ロンドン補習授業校　大塚　敬昌

ロンドン補習授業校は，アクトン校舎，カムデン校舎，クロイドン校舎の３校舎があり，約1,300名の児童生徒が，小学部，中学部，高等部，そして基礎部（日本語を第２母国語とする学部）のそれぞれに在籍しています。ロンドン近郊の約600近くの現地校に通学している児童生徒が，毎週土曜日，年間約40回の授業日に，国語の学習をするために登校しています。

特に，「土曜日は国語（日本語）の日」を合言葉に，国語力の保持・伸長をはかりながら，日本の学校生活を体験できる貴重な場，ロンドン補習授業校にはこんな役割があると，私たち派遣教員は考えています。

しかし，近年の傾向を見ると，子どもたちの在英年数も多様化してきており，必然的に言語の発達段階や特性も変化してきています。当然，生活言語の中心が英語になっている子どもも少なくありません。ということは，今まで以上に，担任講師の教育的資質と指導力の向上をはかり，子どもたち一人一人の国語（日本語）力に応じた，きめ細かな対応ができるよう，講師を支援していく必要があるということです。

そこで，本校では，平成10年度より「豊かで確かな学力を育む国語教室をめざして」のテーマのもと，土曜日３時間という限られた授業時間の中で「子どもたちが喜びとやりがいを感じ，土曜日の授業が楽しくよくわかる」学校づくりをめざし，継続的な研究・実践に取り組んでいます。特に，先に述べた講師への様々な支援の方法について研究をしているところです。

具体的には，講師への直接的な指導支援として，各校舎ごとに授業参観・授業研究，放課後の学習会や研修会の実施，ならびに講師同士の実践発表等を通して，教育的資質と指導力の向上をはかっています。また，それにあわせ，指導方法についての相談やアドバイス，教材資料の提供等，間接的な指導支援も行っています。

限られた時間しか共に学校生活を過ごすことができず，その上３校舎にわかれて運営されている本校。今後も子どもたち一人一人のために，講師に対するマネージメントの充実をはかっていく必要があると考えています。と同時に，日本の教育環境・教育条件とは全く異なった中での「国語（日本語）学習」の充実のために，さまざまな課題をクリアーしていく必要があると感じています。

カラカスで考えること

カラカス日本人学校　石塚昌義

カラカス日本人学校は，ヴェネズエラの首都カラカスから約２０Kmはなれたアティージョという町の近くにあります。

このアティージョに焼き物工場があります。先日はこの焼き物工場に小学部の児童をつれて校外学習に行って来ました。子どもたちは職人さんがろくろでいろいろな物を作るのを見学した後，一人１Ｋｇずつの粘土をいただき手びねりに挑戦です。お皿やコップに加えて，亀やねこなどが次々にできあがりました。

ご主人とお話しをしていると「私はマシコで焼き物の勉強をした」とおっしゃいます。どうも栃木県の益子のことのようです。後から私は日本では益子の近くに住んでいますと言うと，たいへん喜んでいらっしゃいました。

日本から見るとヴェネズエラは地理的にも文化的にもたいへんに遠い国ですが，ここに住んでいると日本にゆかりのある物をいろいろなところで見かけます。

町にはトヨタ，ホンダなどの車があふれ，人々のあこがれの電気製品はソニーです。

テレビでは「ウルトラマン」「キャンディー・キャンディー」新しいところでは「ポケモン」や「デジモン」などを放送しています。最近は「おしん」もやっているようです。（もちろん，すべてスペイン語で吹き替えがされています。）

先日スーパーに買い物に行くと１３～４才の子どもが「気」という漢字を書いた紙を持ってきてました。そしてこれは何と読むのか，どういう意味なのかと，質問されました。ヴェネズエラの人にとって日本はちょっと不思議な，何となく気になる国のようです。

今，ヴェネズエラは通貨ボリーバルが急落し（２００１年９月1＄＝７１４Bs　２００２年９月1＄＝約１４５０Bs）同時に大幅なインフレが進行しています。ご記憶の方もいらっしゃると思いますが，４月には日本の新聞でもヴェネズエラの不安定な政治の様子が報道されました。そして社会不安の増大に伴い様々な犯罪も増えています。

このような社会情勢なので，生活も教育活動もいろいろな面で制限されていますが，できる範囲でこちらの人に日本のことを伝え，ヴェネズエラのことを吸収していきたいと思っています。

ローマ日本人学校

ローマ日本人学校　村上　雅美

たくさんの緑や花々に囲まれ，暖かい雰囲気のただようローマ日本人学校。季節はずれの朝顔に，朝から丁寧に水やりをしている児童・生徒の姿がみられます。校内には，スシーナ，びわ，なし，ぶどうなどの樹木があります。木に登り，昼食後のデザートとして季節折々の実をおいし

そうにほおばる姿がみられます。
　ローマ日本人学校では，教科の枠を越えた体験的・問題解決的な学習を小学校低・小学校高・中学校の３ブロックにわけて実施しています。私が担当の小学校高学年ブロックのテーマは，「あったかハートをひろげよう」です。１学期には，難民収容福祉施設「カーサ・ディ・クリスチャン」との関わりができました。そこで暮らす人々やスタッフの方々との触れ合い，ボランティア清掃などを通して，子供たち自身が自分たちのもっている「やさしさ」を見つめ直すことができました。かき氷作り大会を一緒に楽しんでくれた，アフリカから来たというお母さん。狭い庭でも日本人の子と一緒に行うサッカーを喜んでくれた少年の笑顔。片腕が不自由ながらも，一緒に草取りを一生懸命行っていた男の子。どの顔も忘れることができません。「やさしさって何だろう？」，「あったかハートを広げるにはどうしたらいいのだろう？」と今後も，児童といっしょに追究していきたいと考えています。
　年間を通して，小・中合同のたくさんの行事も行われます。１０月初めには，ローマの北東にあるペルージャのアグリツーリズモで，３泊４日の農場体験学習が行われました。やぎ・羊追い，森歩き，豚や鶏のえさやり，自然の果実摘みとそれを使ったジャム作り…。盛りだくさんの活動を児童・生徒らとともにこなしていきました。宿舎の水がなくなってしまい，一晩，トイレの水もシャワーの水も出ない経験をし，水の大切さを身をもって体験することができました。流れる川の透明なこと，鮮やかな緑に彩られた山々が綺麗だったこと…田舎っ子でも都会っ子でもない児童・生徒にとっては，すべてが新鮮に映ったようでした。

テヘランよりｐａｒｔ　Ⅱ

テヘラン日本人学校　　小林　信行
　イランでの生活も１年半が過ぎました。昨年はアフガン戦争があり，今年はイラク戦争が起こるのではないかと騒がれています。改めて中東の難しさを感じております。
　さて，今回は６月に宿泊学習を行った世界遺産イスファハーンと９月に行ったテヘラン日本人学校運動会を紹介します。
（１）「世界の半分」「イランの真珠」と讃えられたイスファハーン
　今から約４００年前にサファビー朝ペルシャの首都に定められ発展した都市です。中でもエマーム広場は，世界遺産に指定されています。今年の宿泊学習はこの広場で写真撮影活動を中心に行われました。子どもたちは，モスクに入り感嘆の声をあげ，イランの伝統工芸の彫金に夢中になり，アリカプ宮殿から王の気分を味わいました。特に片言のペルシャ語でペルシャ商人と互角に渡り合い値引き交渉をする子どもたちにたくましさを感じました。撮影された子どもたちの写真は，校内に掲示され保護者・日本人会の皆さんからも賞賛されました。
（２）テヘラン日本人学校運動会
　９月２０日（金）に毎年恒例のテヘラン日本人学校運動会が行われました。この運動会は，日本人学校の運動会というよりは日本人会の運動会という方が正しいかもしれません。運動会は，イスラムの戒律により男女一緒に運動することは許されないので，特別の許可をもらい，体育館内で行われます。
　また，昨年よりイラン文部省の人や外国人学校の先生を招待し国際色豊かな運動会となっています。日本の伝統的な運動会種目の綱引きや玉入れを日本人と諸外国の人たちが一緒に楽しみました。イランでは，現地校との交流が制限されています。その中でささやかながら，国際交流ができたことは子どもたちにとっても良い体験となったと思います。

エマーム広場（かつては，王の広場と呼ばれていた）
マスジェデ・シェイフ・ロトゥフォッラー寺院内部

運動会風景
（テヘラン日本人学校）

子どもたちのパワーが私の元気の源　ー二度の退避を乗り越えてー

在パキスタン日本国大使館附属　イスラマバード日本人学校　野上郁男

昨年９月の米国同時多発テロ事件から１年が過ぎた。その間，自分を取り巻く世界は大きく変化し，予想しなかった（したくなかった）まさかの経験をしてしまった。テロ事件に端を発する国内の治安悪化と，インドとの軍事衝突のおそれとによる２度の国外退避である。

今でも，市内や近郊で爆破事件・銃乱射事件・大統領暗殺未遂事件等が起き，ニュースを聞くたび，新たな緊張を強いられる。

ここに来るまでは，湾岸戦争，ボスニア・ヘルツェゴビナ紛争など世界各地の軍事的な衝突を見ながら，「たいへんだなぁ。」とは思っても，どこか遠くの話だった。しかし今はそうではない。毎日インターネットやテレビからの情報入手は欠かせない。国際社会の変化や諸外国の出来事が自分たちにダイレクトに関わってくる。すぐに他人事ではなくなる。常に世界の情勢に目を向け，平和を願わずにはいられない。世界がつながっている，一つであることを強く実感する。平和な日本では正直あまり感じなかったことだ。この地で，実に大切なことを学ぶことができたと思う。

しかし１年前と変わらないこともある。それは，今でもこの街が自分にとって住みやすいということである。街角に銃をもつ警察官や兵士が増えても，人々は相変わらずのんびりマイペースである。それぞれが自分の道を焦ることなく一歩一歩生きている。明日のことは気にしない。「インシャアッラー＝神のみぞ知る」である。そしてそれ以上に変わらないものがある。それは日本人学校の児童・生徒の明るい声である。学校の周りに銃をもつ警官や警備員の数が増えても，壁の高さが以前よりずっと高くなっても，スクールバスに警護車がつくようになっても，退避による臨時休校で友だち同士が一度は離ればなれになっても，学校が再開された今は，またいつもの元気な声が学校中に響き渡っている。もしかすると，私は，本当はもっと緊張した生活を送らなければならないのかも知れない。しかしそんなことを忘れてしまうほど，楽しい毎日を過ごしている。子どもたちの明るく元気な声や生き生きしたパワーが，私の有意義で充実した生活の源なのである。

平成１４年度派遣

バングラデシュでの半年

ダッカ日本人学校　　鈴木　博

ダッカへの赴任が決まり，その地名に聞き覚えがなく，調べることにした。少ない文献の中から出てくる言葉は「洪水」や「疫病」。生活環境がよくないことを知ったが，不安よりもまだ見ぬ世界への憧れの方が強かった。

家についた私を待っていたのは，風呂場を占拠したコウモリと，壁をはい回るヤモリだった。「向こうではトカゲを食べるんだぞ」とおどされて来たが，本当に食べるのかも…と思ってしまった。

ダッカ日本人学校は児童・生徒数１４名。休み時間には小学１年生から中学３年生までが，同じグランドで１つのボールを追いかけている。お昼にはお互いのお弁当のおかずを交換したり，冗談を言い合ったり。中学生たちはとても面倒見がよく，みんな兄弟のようだ。他校との交流も盛んで，現地の学校と七夕集会を行ったり，フレンチスクールを招待して水泳大会を行ったりしている。

学校から１歩出ると，そこはもう別世界。トタンで囲まれただけの小さな家が，所狭しと建ち並ぶ。泥水で身体を洗い，それは生活用水でもある。生ゴミの臭いとカラスの大群。けたたましいクラクションの音。リキシャや車の混雑は，日本の比ではない。やせ細った子供を抱き，髪の乱れた母親が，金をくれと車の窓をたたく。排気ガスで汚れた空気は，空が青いことを忘れさせる。

市場に行けば，よほど日本人は珍しいのか，あっという間に人だかりができてしまう。悪気はないのだろうが，ジロジロ見られることはあまりいい気がしない。荷物を持ってあげるから金をくれと幼い子がたくさん集まってくる。断るのが大変だ。こんな小さな子までが商売しなければならないこの国は，貧富の差が激しいことに気付かされる。

そんな生活に慣れるのに半年を要してしまった。日本にいては見えなかったことが少しずつ見えてきた。政府や警察の理不尽さに腹を立てることも多く，きちんとした教育を受けられない人が多いという事情も嘆かわしく思う。一方で，大学や海外留学で教育を受けたごく一部の人たちは，自国を見捨て外国へ移住してしまう。愛国心があまりないのも現状だ。

日本人学校の子どもたちはこの国が好きではない。劣悪な生活環境だけでなく，日本での常識が通用しないことに不満を感じているからだ。今の自分にできることは，子どもと共にこの国のよさを見つけること，そして，遠く離れたこの国から日本を見つめ直すことだと考えている。

問われる指導力？小さな学校の個に応じた指導

グァテマラ日本人学校　立石　祐之

赴任して半年，現在，現地の言葉（スペイン語）習得に必死になっている毎日です。校内では日本の教育課程に準じてカリキュラムされているので，子どもたちと教室の中ですごす分には事欠かないのですが，校外での体験学習の交渉など現地と関わっていく場面が多く，通訳がいるわけでもなく，細かい打ち合わせができるよう何とかしなくては，という感じです。

本校は首都グァテマラシティの校外に位置し，全校児童・生徒１５名，派遣教員６名（含校長１），現地採用教員３名，現地採用職員２名（平成１４年１０月１日現在）の少人数の学校です。校舎も大きな民家を改造してできています。児童生徒の中には日本語を母国語としない（日常会話には特に支障はないが）日本語指導が必要な子どもたちもいます。

子どもたちが１５名？個に応じた指導が行き届いていいね。と誰もが言いますが，ここで大きな課題があります。

教員として，私たちのめざすものは，子どもたちが，自ら可能性を最大限に発揮し，社会の様々な人と交わりながら（子どもたちの及ばない点については支援をしながら），各年齢段階にふさわしい生活の充実を図らせ，生涯にわたって役立てられ，生きて働く力を，体験的に身につけさせていくことではないかと思います。そして，一般に私たちが身につけさせたいと考えているいくつかのスキルが，実際の指導においては，発達年齢に重きを置くがあまり，発達課題を達成するのに最も適当な内容（評価基準）に縛られ，個の持つ多様な座標軸に当てはまらないというジレンマに遭遇します。特に，生涯にわたって活用する母国語の習得が中途半端になってしまわないように気を付けなければならないと思います。

教育の目標とは，現在及び生涯にわたる，より自立的な社会参加の実現を目指すものです。そして，教育の内容は，そのために今，この子に何を身につけさせるかということです。つまり，学校の役割は，その年齢段階にふさわしい学習集団を成立させるのと同時に，一人一人の様々な条件の違い，やり方の違い，課題の違いに対応できるシステムを作り上げていかなければならないと思います。学習機会の選択と均等は，究極的に個々の子に対する保護者や本人の願いを受け，生涯にわたって生きて働く力を身につけさせる観点から考えられなければならないと思います。本校で，日本語指導が必要と感じる児童生徒は，保護者が日本への関わり持ち，日本の言葉のすばらしさを感じ，日本のアイデンティティと日本語習得に期待をして，本校に預けられていると思います。そのような声に応えられるように日々の指導をがんばっていきたいと思います。（尚，彼らは，現地理解教育の一環として実施している学校交流では，現地理解の架け橋として貴重な宝となり，活躍しており，スペイン語の未熟な私にとってとてもたよりになる存在です。）

最後に，本校ホームページが今年，９月に開設されました。

http://www.geocities.co.jp/NeverLand/4250/index.html

学校の様子など伝わるかと思います。どうぞご覧下さい

学校交流会

雑感

ボンベイ日本人学校　齊藤貴司

インドに来て６ヶ月が経ちました。こちらに来る前はあれもしたいこれもしたい，いろんなことを見て聞いてやってみたいと思っていましたが，振り返ってみるとほとんど何もしていない感じがします。在外派遣をされた諸先輩方にはご理解いただけると思いますが，仕事は大変忙しいです。当たり前のことですが，空き時間がほとんどありません。ボンベイ日本人学校は９名の教員がおりますが，先輩教員は仕事ができる方ばかりです。次から次へと仕事を片づけ，休日も仕事をこなし，さらにボンベイライフを楽しんでいます。とにかく仕事が速く私などはただただ感心するばかりです。私も早くそうなりたいと思いますが，片づけても片づけても，あとからあとから仕事ができて，放課後，帰宅後，休日と仕事をしてやっと追いつくといった感じです。仕事は充実しています。その分休日は家で１日寝ているなどということもよくあります。私が赴任したボンベイは大都市です。高層ビルもあります。車もたくさん走っています。ファッショナブルな若者たちが携帯電話を片手に歩いています。とても近代的な町で野良牛を見かけることはほとんどありません。一方，サリーやパンジャビスーツといった民族衣装を身にまとった女性たちもたくさんいます。イギリス統治時代の古い建物があったり，それ以前のヒンディー教の遺跡も残っていたりします。ボンベイは映画の町でもあります。この町の人たちは映画好きです。ボリウッドといわれるように映画館がたくさんあり，ポスターもあちこちに貼ってあります。しかし，本当のインド人の姿を見たと実感できるのは，祭りのときです。カースト制は廃止になったと聞いていますが，現状は違います。多くの人が路上で生活し，アジア最大のスラムもあります。いくら映画好きでもそれはある程度の階層以上の人たちの娯楽です。祭りのときは町中の雰囲気が変わります。歌い踊る人々のエネルギーこそ本当のインド人を感じさせます。先日も教員仲間で祭りを見て，地元の人たちと夜遅くまで踊りました。児童生徒も祭りに参加し，その話を総合的な学習の時間で調べているインドの神様や祭りのまとめに生かし，また，作文発表会で発表しました。子供たちもインドの生活を通していろいろなことを学んでいます。私がここで見聞きしたことを子供たちに返せるように，

また，日本に帰国したときに出会う子供たちにも教えられたらと思っています。

朗読作文発表会
写真は小４から中学部と，来賓の印日協会の方々

１０ｔｈガネーシャ
商売の神様として人気があるガネーシャ（象頭神）の大きな人形を祭りの最終日に海に流す。

北京日本人学校での日々

北京日本人学校　　遠藤　弘太郎

北京に来て，早半年が過ぎました。生活の立ち上げと，新しい学校での職務に追われましたが，これまで先輩の先生方，そしてお世話家族の皆様のおかげにより，１学期を終え，ようやく生活のリズムもできて参りました。この書面をお借りして，拙い文章ではありますが，この半年間で最も印象に残ったことをご報告させていただきます。

夏休みに入ってすぐに，北京日本人学校の同僚と２泊３日で河北省の貧困地域の小学校にボランティアで教育活動を行ってきました。河北省には，北京日本人会による尽力で８校の学校が設立されており，その中の１校を私たちは訪問しました。

当初，私自身中国語が殆ど話せないため，授業が成り立つのか非常に心配しましたが，通訳の方の協力と現地の子どもたちの高い学習意欲のおかげで何とか授業を行うことができました。

私が担当したのは，初日の第１時目の学級活動でした。出会いの時間でもあるので，子どもたちと私たち日本人学校教員との親睦をめあてにしました。授業が始まったときには，日本では信じられないくらい緊張した子どもたちの様子でしたが，いくつかのゲームをしていくうちに，子どもたちに笑顔が見られるようになりました。

当初の私自身の不安は消え，次の日からの活動が非常に楽しく行うことができました。今回のボランティアでは，経済的に恵まれない地域でも，非常に高い学習意欲を持っている子どもたちが大勢いること，そして困難に負けない強い意志を子どもたちは持っていることに強く感動しました。そして，私たち教員にも，意志さえあれば草の根レベルで日中友好に役立つことができると実感しました。

今回，本校児童生徒による空き缶リサイクル活動で得られたお金でサッカーボールを寄贈しました。感動が薄れないうちに貧困地域の子どもたちの教育に少しでも役立つように，２学期から空き缶リサイクルの活動を強化しました。

今回のボランティア訪問をぜひ，来年も続け，日本人学校の日々の教育活動に反映させていきたいと思います。

また，機会があれば，こちらでの生活についてご報告したいと思います。

あ　と　が　き

昨年のアメリカ同時多発テロ以来，アメリカを中心とした世界的な緊張状態を迎えました。それ以前から続いている，イスラエル・パレスチナ紛争，インド・パキスタン紛争も激しさを増しています。そのような中で，日本と北朝鮮間での国交正常化交渉が始まりましたが，その前提としての拉致問題の解決は，依然膠着状態が続いています。

このような情勢の中での国際理解教育は「異文化理解」の重要性が以前にも増して強まっているのではないでしょうか。他の民族，他の文化について考えるとき，私たちはつい，日本を基準にして考えがちです。しかし，基準を日本人のものの見方，考え方においたままで「異文化理解」ができないことは，海外での生活体験者であれば簡単に分かることです。この点で，海外生活体験者の経験を生かした指導の工夫が必要で，私たちの使命は重要であると思います。

さて，最後になりましたが，今回の広報誌発行にあたり，お忙しい中，快く原稿依頼にお応え下さった方々，ありがとうございました。この場を借りてお礼申し上げます。

なお，広報誌に関するご意見は，下記のメールアドレスまでお寄せ下さい。

（ym1960@sky.zero.ad.jp）　（文責　森作）